

教皇フランシスコ追悼文

2025年4月29日 カトリック北一条教会
教皇追悼ミサにて 勝谷太治司教

復活祭にバチカンのバルコニーから、「復活おめでとう」と全世界の人々に向けて祝福を送られた教皇フランシスコは、その翌日突然旅立たれました。たびたびの命の危険を乗り越えられた教皇がこれから回復されると願っていましたが、突然の訃報に私たちは大きなショックを受け、いまだ深い悲しみとともに、優れた牧者を失った喪失感の中にいます。

教皇フランシスコは皆さんご存じの通り、困難や悲しみの中にある人々に常に寄り添い、深い共感を表す教皇でした。その庶民的な姿は自分の住居の目の前にいるホームレスのためにバチカン広場の施設の一部を開放したり、彼らを食事に招いて一緒に会食をしたりする姿の内に表れていました。また、毎年聖木曜日には刑務所に収監されている人々を訪問し彼らの足を洗い口づけをしていました。今年も死の4日前に厳しい体調の中でそれを実践されたのです。

このような人々と共にあろうとする姿は、教皇になってからの最初の公式訪問地をランペドゥーザ島にしたことによく表れています。ランペドゥーザ島は、多くの移民が海で溺れ死んだ悲劇を象徴する島です。教皇は最初の公式訪問をこの地を選び、現地の海の前にたたずみ、この海に沈んだ人々のために祈り続けられました。世界が排他主義に陥り、分断され、移民に対して無関心になりつつある中、それを憂い、警告を与えられたのです。その後アメリカ国境に壁が作られようとしていた時には当地を訪れ、「私たちは壁を作るのではなく橋を作りましょう、それがクリスチャンです」と言われたのは印象的です。

また、多くの反対を受けながらも権威主義を否定し改革を推し進めました。特に教会の中に見られる「聖職者至上主義」を強く批判し、ご自分の足元であるバチカンの改革を力強く推し進められました。この権威主義とは全く反対の象徴的な姿をわたしは直接拝見することができました。2018年のシノドス、わたしは会期約1か月のこの会議に参加していました。会議は全員が議場にそろっているところに教皇が入場し、拍手をしてお迎えするのが通例ということでしたが、フランシスコ教皇は初日から最終日まで、私たちと一緒に自分の手荷物をもって歩いて会場に来られ、会場入り口で参加者を出迎え、時間まで議場で談笑し、「そろそろ始めましょうか」という形で会

議が始められていました。また、休憩時間も、自分の部屋に退出せずに、ずっと私たちと一緒におられました。

このように、いつも人々と共におられようとするフランシスコ教皇はまさに「羊の匂いのする牧者」（福音の喜び 24）でした。彼はいつもこのような独特の表現を用いますが、わたしが印象に残っている言葉があります。誰かに寄り添うとき「その人の手に触れ目を見るように」とおっしゃったのです。一人一人に対する優しさと愛を感じる言葉です。このような限りないやさしさを示す教皇でしたが、同時に教皇として世界にメッセージを発信するときには、その改革者としての妥協しない厳しい姿も示されています。

教皇になった年に出された「使徒的勧告 福音の喜び」は世界に向けての力強いメッセージでした。世界を支配している経済システムに対し、「『殺してはならない』という（十戒のおきてが）人間の生命の価値を保障するための明確な制限を設けるように、今日においては（『殺してはならない』にかわって）『排他性と格差のある経済を拒否せよ』と言わなければなりません。この経済は人を殺します。」とのべ、世界の経済格差を批判し、その中で社会の片隅に追いやられ排除されている多くの人について言及しました。

「飢えている人々がいるにもかかわらず食料が捨てられている状況を、私たちは許すことができません。これが格差なのです。」

「わたしたちは『廃棄』の文化をスタートさせました。もはや人間が社会の底辺へ、隅へ、権利の行使できないところへ追いやられるのではなく、社会の外へと追い出されてしまうのです。排除されるとは『搾取されること』ではなく、廃棄物、『余分なもの』とされることなのです。」

このように現代の文明、経済に強い警告を与え、誰ひとりとして排除されない世界を目指す教会の姿を明確に打ち出されました。

2015年には回勅「ラウダート・シ」を発表し、総合的エコロジーの観点から共通の家である地球を守るため、教会の進むべき方向性を示されました。そして何より常に発信していたメッセージは、世界の紛争や戦争に対してです。

2019年教皇訪日の折、長崎広島を訪れ「核兵器を使用することは犯罪であり、所有すること自体倫理に反することである」と核廃絶に向けての強いメッセージを残されました。この言葉に被爆国において、核廃絶を願う私たち日本国民はどれだけ勇気づけられたことでしょうか。

教皇最後のメッセージとなった死の前日の復活祭メッセージ、その中で教皇は現在世界中で発生している戦争や紛争を具体的にあげ、その終結のために祈るように勧め、政治責任を負う世界のすべての人々に、自らを閉ざす恐怖の論理に屈せず、貧しい人を助け、飢餓と闘い、発展促進の取り組みを育てるために、資金を用いるように呼びかけました。教皇はかねがね、拡大する世界の軍事費の一部を出し合って基金とし、貧しい人々の為に使うよう呼び掛けておられました。私たちは特に、世界中に蔓延しつつある戦争、紛争の終結を願い、今この瞬間も死に直面し、その危険にさらされている人々のために祈りましょう。

最後にわたしがフランシスコ教皇の言葉として強く心に残っている言葉を紹介합니다。前回の WYD(ワールドユースデイ)リスボン大会において、その歓迎式典の中で、集まった数十万人の青年たちに向かって自分の後に繰り返して言うよう求めた「トドス(TODOS, スペイン語で「すべて」の意)」という言葉です。教会はすべての人の家であり、すべての人に居場所がある、それは、あなたたちカトリック信者のみではなく、例外なくすべての人です。誰も排除されない。すべての人です。トドス、トドス、トドスと大地が揺れるような叫びが響きました。

教会はすべての人のための家であり、その扉は常に開かれていなければならないのです。教会は、フランシスコ教皇曰く、多くの人が傷ついた戦いの後の "野戦病院" です。人々の問題や現代世界を引き裂く大きな不安のなかにあって、そのただ中で奉仕するのが教会です。思想信条やその人が何者であるかにかかわらず、すべての人に身をかがめ、その傷を癒すことのできる教会であるように。これが、フランシスコ教皇のイメージする教会の姿です。

今、札幌教区の教会は少子高齢化の流れの中、司祭の数も減少し困難に直面しています。そのような中で、私たちが陥りやすい誘惑は、自分たちの組織や、建物をいかに維持するかという発想にとらわれ、前述した教会の本質、使命を忘れてしまうことです。シノドスの歩みの中、「希望の巡礼者」を標語とする聖年を私たちは過ごしています。すべての人に寄り添い、耳を傾け、共に歩む教会を目指して、フランシスコ教皇の遺志を継いでいきましょう。